

外山滋比古先生を偲ぶ

栗原 裕

2020年7月30日、外山滋比古先生が胆管腫瘍のため療養先の病院で亡くなられた。96歳であった。新型コロナウイルス感染拡大第2波のさなかのことで、葬儀は近親ほかごく少数の人たちだけで営まれた。

先生は90歳を越してなお矍鑠として執筆活動旺盛であった。亡くなられる前年にも、『惰性と思考』(扶桑社新書)、『伝達の整理学』(ちくま文庫)、『考える力 新しい自分を創る』(海竜社)、『100年人生7転び8転び—「知的試行錯誤」のすすめ』(さくら舎)、『老いの練習帳』(朝日新書)を出して、後に続く、とりわけ中高年世代に刺激を与え続けていられた。著書総数はわれわれに把握できているかぎりでも240冊を数える。書物に採録されていないエッセイ類は数知れず、追跡できていない。

信じられないことであるが、若き日、先生はものを書かなくて、師の福原麟太郎先生ほか周囲の人たちに気を採ませたと聞く。『英語青年』という最高度の専門月刊誌の編集を一手に委ねられて多忙であったことに加えて、それ以上に、自身の感覚に誠実であろうとするかぎり、日本の英語英文学研究の時流主流に馴染めないものを感じていられたことがあったからのようである。秘かに「道を歩かぬ人、歩いた跡が道になる人」を座右の銘としていられたのでなかったか。

はじめてわれわれが先生に接したのは、1960年日米安全保障条約改定の年、大学に入学した初年度である。先生から専門科目の英文学演習とともに一般外国語科目の英語講読の授業を受けることになった。講読の方の前期の教科書が*Parkinson's Law*であった。仕事は膨張するものでもっとも暇な人がもっとも忙しいとか、役人はなすべき仕事と関係なく(仕事がなくなっても)倍々で増え続けるとか、会議に費やされる時間は議案に含まれる金額に逆比例するとか、まことしやかに論じられる逆説洒脱の内容で、それが先生の手にかかると、輪をかけて生き生きとおもしろくなるのである。大学とはこんなにもおもしろいものかと、田舎出は仰天した。

それだけではない。大体、先生が読んでみせるのであったが、テキストの行文行間から彼我の修辭、思考と論理、習俗と文化が立ち現われ、われわれは興奮した。毎時間、授業の終わった直近の空き時間に、明るい喫茶店「白樺」で熱に浮かされたように復習をし議論を闘わせた。われわれは「白樺派」になったのであった。

その頃には、すでに先生の執筆活動には火が付いていた。後になって知るのであったが、先生の着想がつぎつぎと『修辭的残像』『近代読者論』『読者の世界』『葦のずいから』などに結実していく過程に、われわれはまさに立ち合っていたのであった。授業が

おもしろくないはずがなかった。

紙の上には切れ切れの語が並んでいるのに、それを読むと、どうして切れ目が消えてまとまりのある意味が現れるのか。リーディングの根拠となるはずのこの事態について、これまで誰も問うことがなかった。映画のフィルムの一コマ一コマは切れているが、一定の速度で映写すると映像に動きが生ずる。残像という生理作用による。これに似た心理作用がことばを読むときに働いているのではないか。それを「修辭的残像」と呼ぶことにした。一種の作業仮説であったが、先生にとってこれは「ジェネラティヴ・アイディア」であった。

当然のこととして、ここから引き出されるのは、要するに、読者が意味決定の担い手として役割を果たしているということだ。このことを確認したとき、これまで作者中心の文学研究や原本中心の文献学が提示してきたとは異なった新しい文学の世界が姿を現わすことになる。それを英米に先駆けて示してくれたのであった。『近代読者論』『ホモ・メンティエンス』『エディターシップ』『異本論』『古典論』と続くその後の一連の著作は読者の主体性と創造性を正当に評価するところに展開し、論理に間然するところがない。「ShakespeareのStage Direction」(1956)、「18世紀におけるShakespeareのEmendation」(1961)、「ShakespeareのPunctuation」(1963)の東京教育大学文学部紀要『西洋文学研究』に発表された論文3部作は、シェイクスピアの受けた異本化の様相を跡づけて見せたその例証であった。

欧米で読者の立場が脚光を浴びるのが1970年代のことであるから、それより10年早かった。この論理展開は欧米の読者論が追うことのなかったところでもあった。読者を意識することは、英文学を外国文学として読むこと、すなわちアウトサイダーとして接することから来る必然であると、先生は言われる。世間が米英を敵にまわして戦争一色に染まっている時期に英語英文学を選んだ人である。わが道を切り拓くのは出発点で決まっていた。さらに先へ行って、このアウトサイダーの位置が文学に限らないおもしろさを発現させる起点になっていることに気づく。その局外非当事者性のメカニズムを描き出そうとするのが『第四人称』であった。

早くから日本語とその表現に関する試論を数多く発表していられたが、やがて求められるままに実にたくさんの知的で刺激的な散文と柔らかで爽やかな随想を書かれて、多くのファンが生まれる。小学校の国語の教科書に使われた「赤い風船」はよく知られているであろう。一時は入学試験問題のテキスト頻出作家として予備校が特別対策を講ずるほどであった。併任で大学附属幼稚園の園長に就かれた頃から、育児と幼児教育に関して熱を込めた発言が急激に増える。創造的発想の手法を具体的に説いた『思考の整理学』がいまなおベストセラーであり続けているほかに、ご自身の年齢の経過に並行するようにして、中高年の人たちが知的で活気に満ちた愉快な人生を送るための指針を数多く残された。『思考の整理学』が若き世代の学徒を虜にするように、これらの指南は中高年のゆとりを得た世代を虜にする。おもしろいのである。

*Parkinson's Law*で私自身のその後が決まってしまったのであったが、気後れがし

て先生にはなかなか近づくことができなかつた。近しく指導を受けるようになったのは、大学院に進学して先生の編集する雑誌のお手伝いをする機会に恵まれてからである。お手伝いは2人組みであったが、相棒に専任職が決まって東京を離れると新しい相棒と組むということを幾度か繰り返した。私自身は都心の大学に勤めることになったから、ずっとくっついたままであった。『英語文学世界』と『月刊ことば』ともに創刊から終刊まで延べ13年9か月である。発行元から手当てを受けていなくはなかつたが、毎月、雑誌が出来上がると、先生はごちそうをしてくださった。学問と人生の個人指導に浴して、贅沢で充実した歳月であった。

晩年、サービス付き高齢者住宅に居を移してからも、先生は忙しく仕事をこなしていられたから、邪魔をしないようにお邪魔した。最後まで意気軒昂で、そのたびに発破をかけられた。最後にお邪魔したあと、半月ほどしたところで異変が発見されて入院が決まったのであった。残されたメモの中に「忘却は力なり」と並んで「人の行く裏に道あり花の山」の句があった。

学問のみならず生活万般においてお世話になり、感謝の念はとてことばに尽くせない。いまは、ひたすら、ご逝去を悲しみ、ご冥福をお祈り申しあげている。

(大妻女子大学名誉教授)

外山滋比古先生 履歴・業績

[略歴]

- 1923年 11月 愛知県に生まれる
- 1941年 4月 東京高等師範学校入学 1944年 9月卒業
- 1944年 10月 東京文理科大学入学 翌年応召終戦 1947年 9月卒業
- 1947年 10月 東京高等師範学校附属中学校教諭(1949年 3月まで)
- 1949年 4月 東京文理科大学研究科入学(特別研究生) 1951年 3月修了
- 1951年 4月 研究社出版株式会社嘱託 月刊誌『英語青年』編集(1963年 3月まで)
- 1954年 7月 東京教育大学文学部講師(専任)
- 1957年 1月 東京教育大学文学部助教授(1968年 3月まで)
- 1960年 3月 「読者論研究」により東京文理科大学賞受賞
- 1962年 3月 『修辭的殘像—読者の方法』により文学博士
- 1963年 6月 表現学会発起人に加わる
- 1966年 4月 月刊誌『英語文学世界』創刊主幹編集(1977年 4月終刊)
- 1968年 4月 お茶の水女子大学文教育学部教授(1989年定年まで)
- 1977年 11月 『月刊ことば』創刊主幹編集(1980年 6月終刊)
- 1980年 4月 お茶の水女子大学附属幼稚園長(併任1985年 3月まで)
- 1989年 4月 お茶の水女子大学名誉教授

- 1989年 4月 昭和女子大学教授(大学院1997年3月まで)
 1995年 3月 日本放送協会放送文化賞受賞
 1997年 4月 十文字女子短期大学特任教授 同大学附属幼稚園長(翌年3月まで)
 1997年10月 昭和女子大学特任教授(2000年3月まで)
 2001年 3月 全日本家庭教育研究会総裁 日本教材文化研究財団理事長(2005年9月まで)
 2001年 4月 勲三等旭日中綬章受章

○その他

- 1) 1960年代後半から10年ほどの期間に岩手大学富山大学等国立10大学で集中講義を行う
- 2) 1980年代に前後して文化放送番組審議委員 日本放送協会放送用語委員 読売教育賞選考委員 国立国語研究所評議員 日本学術会議専門委員 文部省大学設置審議会専門委員 東京ケーブルネットワーク番組審議委員長ほかの各種審議会委員、日本英文学会や日本シェイクスピア協会の役員を務める

[主要著書]

- 修辭的殘像 1961 垂水書房／改訂1968みすず書房
 近代読者論 1964 垂水書房／改訂1970みすず書房
 読者の世界 1969 角川書店
 葦のづいから 1970 角川書店／改訂改題 新・学問のすすめ 1984 講談社学術文庫
 ホモ・メンティエンス 1971 みすず書房
 日本語の論理 1973 中央公論社／1987 中公文庫
 省略の文学 1973 れんが書房／改訂1976 中央公論社／1979 中公文庫
 エディターシップ 1975 みすず書房
 日本語の感覚 1975 中央公論社／1989 中公文庫
 日本語の個性 1976 中公新書
 文学の方法 1976 大修館書店
 シェイクスピアと近代 1977 研究社出版
 異本論 1978 みすず書房／2010 筑摩書房ちくま文庫
 日本の文章 1979 北斗社／1984 講談社学術文庫
 日本の修辞学 1983 みすず書房
 (共編) 英語名句事典 1984 大修館書店
 (編) *A Handbook of Nursery Rhymes* 1985 Kenkyusha
 (共編) 日本名句辞典 1988 大修館書店
 (共編) 現代の批評理論 全3巻 1988 研究社出版
 古典論 2001 みすず書房

外山滋比古著作集 全8巻 2002-2003 みすず書房

第四人称 2010 みすず書房

日本の英語、英文学 2017 研究社

○その他

1) 学問研究の方法手引

知的創造のヒント 1977 講談社現代新書 / 2008 ちくま学芸文庫

思考の整理学 1983 筑摩書房セミナーブック / 1986 ちくま文庫

アイデアのレッスン 2004 あさ出版 / 2010 ちくま文庫

忘れる力 思考への知の条件 2015 さくら舎

その他

2) 育児・幼児教育の指針

親は子に何を教えるべきか 1979 PHP 研究所 / 1991 PHP 文庫

空気の教育 1983 福武書店 / 1989 福武文庫 / 2011 ちくま文庫

わが子に伝える「絶対語感」2003 飛鳥新社

幼児教育でいちばん大切なこと一聞く力を育てる 2012 筑摩書房

その他多数

3) 随想風エッセイ

裏窓の風景 1977 英潮社出版 / 改題圧縮 赤い風船 1984 福武文庫 / 改題再編

裏窓の風景 2010 展望社

ゆっくり急ぐ 2010 毎日新聞社

今昔有情 2011 毎日新聞社

茶ばなし全150話 2014 展望社

山寺清澄 2017 展望社

その他多数

4) 中高年を生きる指南

中年期 2006 みすず書房

コンボジット氏40年 2008 展望社

「人生二毛作」のすすめ 2010 飛鳥新社

老いの整理学 2014 扶桑社新書

大人の思想 2015 新講社ワイド新書

知的生活習慣 2015 ちくま新書

お金の整理学 2018 小学館新書

その他多数